ショーペンハウアーの倫理学

野口　理恵

序　章

私たちは毎日刻々と死に近づいている。その流れからは決して逃れるとはできない。しかし、私たちは頭の中では「死」を理解していながらも、それを現実的に受け止めようとはしない。見て見ぬ振りをしながら「生」を謳歌している。私たちはすぐ目の前にある死を無意識のうちに自分自身の内面の奥深くにしまいこんでしまっているのである。

ショーペンハウアーは人間を「安物の商品 schlechten Ware〔1〕」とたとえている。外側をごまかしの金ぴかで蔽い、痛んでいるところを内側に隠していると指摘するのだ。人々は各々の外見の華美、絢爛を他人に見せびらかす。そのために、私たちは外見に騙され、他人を妬み、次第に自らの内面の満足が得られなくなってくると、愚劣にも、他人の思惑の中において自らが幸福であることを欲するのである。つまり他人の思惑が自身の主目標になってしまうのである。自らの行動を反省してみると、果たしてそうではないと言い切れるものが何人いるだろうか。人々は虚栄の前で、右往左往し、振り回されているのに過ぎないのである。それでは真の道徳的行為とはいかなるものか、考察していきたい。

第一章　生きんとする意志 Wille zum Leben

第一節　生きんとする意志 Wille zum Leben

ショーペンハウアーは主著である『意志と表象としての世界 *Die Welt als Wille und Vorstellung*』において、意志は認識を欠いていて、盲目的で、抑制不能な単なる衝動にすぎないと考察している。さらに意志には表象としての世界が加わり、対象の認識を獲得するとしている。この意志の衝動は「意欲 Wollen」である。また、意志が欲する対象はつねに表象であるこの世界である。そのため現象する世界 die erscheinende Welt は「意志の客体性 seine (der Wille) Objektität」とも呼ばれている。そして生命とは表象を求める意志、すなわち意欲であるため、意志と「生きんとする意志 Wille zum Leben」は同義語といってよい。この生きんとする意志からみれば、可視的世界、現象する世界、生命までもが単なる表象である。そして生きんとする意志と現象は鏡のごとく、「映す世界」と「映された世界」としてどこまでもつきまとう関係にある。そのため盲目的な意志に満たされている限りは、同時にそれに付随する表象の世界、生命までも満たされていることになる。しかし、表象の世界において、生きんとする意志に満たされている限り、この意志の本質に気づくことはないのである。

生きんとする意志は表象の世界の内奥であり、本質的なものである。表象の世界、つまり自然全体は数多性により個体を持つが、本質である意志には個体性をはじめ時間 Zeit・空間 Raum・因果性 Kausalität は当てはまらない。この時間と空間、因果律を「個体化の原理 principium individuationis」とよぶ。また、鏡が割れたときに映す鏡が割れても映された物自体がそのままであるように、表象の世界において一つの個体が消滅した場合でも、生きんとする意志は不変である。

それでは表象としての「私」、身体を持つ「私」はどこに存在しているというのだろうか。私たちは確かに個体として物を見、他の個体それぞれを同一の意志であるとみなすことはない。ショーペンハウアーは、このような万物の中に存在する生きんとする意志から、人間意識を区別しているという見解を、人間の「錯覚 Täuschung」だとし、この錯覚は個体の死によって解消されるものだと指摘する。この人間意識の錯覚は感情の次元でさまざまな苦悩を誘発することになる。

第二節　反道徳的衝動 Antimoralische Triebfedern

それではなぜ人々の多くは、「安物の商品 schlechten Ware」となってしまったのだろうか。

人間にとってすべてのものを成り立たせる根本は意志である。その意志の前に様々な形態の動機が立ち、その動機は意志の渇望を満足させる。そして目の前の動機は姿を変え、意志は多様に動かされる。こうした意志の活動が人間の生活を満たしているのである。動機への渇望は意欲である。そしてそのあらゆる多様な意志の活動に通じている根本テーマは、身体の生存が正常な状態を保ち続けるための欲求を満足させることである。

ショーペンハウアーは次の三種類を人間の根本衝動として定義した。

a　自分自身の快を欲するエゴイズム Egoismus
b　他者の不快を欲する悪意 Bosheit
c　他者の快を欲する同情 Mitleid (2)

すべての人間の行為はこの三種の衝動に還元できると考えたのである。aの衝動は道徳に無関係な行為を生み、bは、道徳的に非難されるべきものである。したがって、道徳的価値を持つ行為はcの同情から生じる行為でなければならない。これら三者のうち、ひとつもそなえていないものは人間ではないとまでショーペンハウアーは云っているのである。

真に道徳的な行為を考察するために、私たちは悪徳と呼ばれるエゴイズム Egoismus と悪意 Bosheit という人間の行為の根本現象をまずは検証する必要があるだろう。

i　エゴイズム Egoismus

まず、道徳的行為とはかけ離れていると思われるエゴイズム Egoismus という人間の根本衝動のひとつを検証したい。時間と空間、根拠の原理 Satz von Grunde は私たち人間の意志の中から生まれ出てくる認識の本質的な形式である。個体化の原理 principium individuationis すなわち時間と空間は数多性 Vielheit を可能にしているため、個体を現象させている根本であるということを意味する。そして一方、物自体 Ding an sich としての意志は、個体化の原理とは関わりなく、一つ一つの現象において全体に分割されることなく存在しているのである。しかし、物自体としての意志を認識することができるのは自分の内面にお

いてのみである。つまり、自分が死ねば世界も消滅するということになり、言い換えればこれは自分が存在するために世界が存在するというような認識であるともいえるのである。すなわち、人間は自分こそが物自体の意志の中心であるという考えに行き着いてしまうのである。この思惑こそが、エゴイズムの本質そのものである。すなわち、エゴイズムとは存在と安寧への衝迫 der Drang zum Dasein und wohlsein である。

人間を含む動物の行為はエゴイズムから発するとショーペンハウアーは考察している。動物の核、本質はエゴイズムと同一なのである。エゴイズムはすべてを享楽し、所有することを望み、少しでも阻もうとするものが現れるものならば、それに不満や憎悪を抱く。そしてそのすべてを敵とみなして滅ぼそうとすることもあるだろう。私たち人間は日常生活において、本能的に利害関係を考えて他人と接しているのである。これは、相手が自分の目的と手段となりえるかどうかを基準としている。もっとも、ショーペンハウアーは不利・害ははじめのうちは気づくことができず、後になってから考えつくものだと指摘している。ここにはすでに人間のエゴイズムが現れ、私たちの生活環境を決定付けている。人間の行為においてエゴイズムは常にどこかの片隅から顔をのぞかせ、自分の利害関係を計算させているのである。以上のことからエゴイズムの格率は次のようになる。

だれをも助けるな、寧ろきみの役にたつならば、万人を害せよ！(3)

ii　悪意 Bosheit・害意 Übelwollen

次に害意 Übelwollen と悪意 Bosheit について考察していきたい。害意は私たちの生活の中で頻繁に見られる。特に低い段階での害意はほとんど日常一般に見られるものである。害意の根源にあるものは嫉妬 Neid である。すなわち日常において他者に抱くちょっとした嫉妬、憎悪のようなものが低い段階としての害意である。そしてこの嫉妬や憎悪が胸の中で長い間育まれていくうちに怒りは大爆発を起こすのである。この害意を誘発するのは、エゴイズムである。つまり、人々はエゴイズムによって偽装された他者の外見に惑わされ、自分自身もエゴイズムによって外見を飾り立てる。そしてそのエゴイズムの偽装があたかも人間の程度の差のように受け取り、不完全な部分や欠点などを見せ付けられて客観的にも喚起されるのである。この状態が続くことによって終いには人間嫌いが生じてしまうので

ある。嫉妬はこのように他人の幸福や財産によって喚起される。

ショーペンハウアーは嫉妬を人間的だと考察し、その反対のものとして意地悪 schadenfreude を挙げている。この意地悪は悪魔的である。嫉妬と意地悪のどちらも確かに観念的ではあるが、それを実践的に見るならば、嫉妬は悪意となり意地悪は残酷 Grausamkeit であるとも言える。これらは他者の不幸や苦悩が目的そのものなのである。これは以前に述べたエゴイズムの目的とは異なる。エゴイズムの目的はあくまでも自分自身の幸福が目的であり、悪意の目的はできる限り他者を苦悩に導くことである。これらのことから次のような格率が生じるのである。

できる限り万人を害せよ！(4)

これまで人間の根本衝動としてエゴイズムと悪意の二つを考察してきた。この二つは悪徳であり、ショーペンハウアーはこれらを反道徳的勢力と称している。しかし一方で、他者から礼賛されるような礼儀正しい行為をとる人間もいる。ショーペンハウアーはこの点に関して、「礼譲ないし礼儀作法は日常的交際の些事におけるエゴイズムの習慣的かつ体系的休止であり、むろん承認された偽装である(5)」と指摘している。私たちが日常生活でしばしば礼儀正しい人に出会うことがあるが、この礼儀とは自分自身を良く見せようというエゴイズムにすぎないのである。それにもかかわらず、私たちは礼儀を重んじ、それが賞賛されるようなことだと思い込んでいるのは、礼儀という偽装によって、醜悪なエゴイズムを隠したいという「臭いものには蓋をせよ(6)」という考えのためである。

以上の二つの反道徳的衝動、すなわちエゴイズムと悪意についての考察を踏まえ、道徳的価値のある行為とはいかなるものかを知るために、私たちは三つの根本衝動のうちの最後のひとつである「同情 Mitleid」という衝動について理解する必要があるだろう。

第二章　同情 Mitleid

第一節　道徳的価値

同情についての考察をする前に、私たちはまず道徳的価値を定義づけておかねばならないだろう。真に道徳的価値を持つ行為とはいったいどのような行為であろうか。ショ

ーペンハウアーは主著において道徳的衝動の前置きとして、私の行為がすべて他者のために行われ、他者の快・不快が私の動機でなければならないと定義している。私の意志を動かし、直接、私の動機となること、他者を自身より優先させること、それはつまり、他者と私の同一化である。

ショーペンハウアーは、すべての行為に快・不快が関係するならば、道徳的価値は、その行為もしくはその行為の中止によって決められると考えたのである。さらに、エゴイティックにならないための唯一の行為は、他者の快・不快のみを考え、それを目的とした場合であるとした。つまり、自分の快・不快が自らの意志を導くように、他者の快・不快が自らの意志を動かし、行為の動機になることこそが、道徳的価値を持つといえのである。すなわち、真に道徳的な価値を持つ行為とは、人間の三つの根本衝動のうち、エゴイズムと悪意が少しも混じることのない、純粋な同情 Mitleid から生じなければならないのである。同情 Mitleid とはその文字の通り、「共に mit」「苦悩する leiden」という意味を持つのである。そしてこの同情こそが反道徳的衝動に抵抗し、かつ意志の否定へ導く唯一の行為なのである。したがって同情の格率は以下の通りになる。

だれをも害するな、寧ろできる限り万人を助けよ！(7)

この命題は二つの命題をふくみ、これによって同情を段階的に見ることができるのである。

第二節　同情の二つの段階

同情 Mitleid の「だれをも害するな、寧ろできる限り万人を助けよ」という格率は、倫理の最高の基本命題である。そしてこの同情は他人の苦悩が原因となって、私の行為の動機となるものであるが、この行為にいたるまでに二つの段階を経ることになる。

同情の第一段階の作用は消極的なものである。私は自らのエゴイズムや悪意と対抗しつつ、自分自身がこれから他者に与えうる苦悩を出来るだけ避けてあげたいという、他者に対する消極的同情が経験的に意識に現れてくる。

同情の第二段階の作用は積極的なものである。この積極的同情は、単に私の他者に対する不正や暴力を防ぐだけでなく、そのうえさらに相手を助けるように私を動かす。同

情が私を動かして他者への活発な援助を行わせるのである。

この二つの消極的、積極的な同情の段階はそれぞれが徳である。ショーペンハウアーは消極的な徳を公正 Gerechtigkeit、積極的な徳を人間愛 Menschenliebe と規定した。そしてすべての徳はこの二つから生じるために、この二つを枢要の徳 Kardinaltugenden（基本道徳）とよんでいる。これは人間にとって根源的、直接的なものであり、人間本性のなかに存在するものである。

i　公正 Gerechtigkeit

それではまず、同情の消極的段階である公正の徳から考察していきたい。

人間は根源的にエゴイスティックな動機を持ち、さらには不正と暴力への傾向性を持っている。私たち自分自身の欲望や怒り、苦悩は自分自身の意識の中に直接現れる。それに対して不正、暴力などの悪意が引き起こす他者の苦悩は、その表象という二次的経路を経てのみ私たちの意識に現れる。そしてその行為が与える他者の苦悩は、私自身が他者から受けた苦悩によって経験的に知り得ている。同情の第一段階である公正の徳の作用というのは、私たちに内在するエゴイズムや悪意という反道徳的衝動が原因となって他者の上に惹起する苦悩を阻止することである。そして「止まれ！　Halt!」と自らのエゴイズムに呼びかけ、他者への不正、暴力を阻止し、他者を守るのである。この消極的同情は次のような格率である。

だれをも害するな！(8)

公正という同情の第一段階目において他者を苦悩に導いてしまうような手段を用いそうになったならば、ただちにその衝動を抑止できるのである。しかしこの抑止は不正のたびに必ずしも現れるものではない。なぜなら不正による他者の苦悩は瞬間的なものや、後から生じるものもあるためである。しかし重要なのは、自分は不正の加害者であるという優越を感じることでさらに相手の苦悩が倍化され、それを強烈に認識することでこの「だれをも害するな」という格率が生じるということである。この格率は次第に理性的熟慮、つまり反省をすることで決意にまで高められる。すなわち、他者の権利を尊重し、そこへ侵犯せず、他者の苦悩の原因になることは決してしまいという決意である。決意にいたることで反道徳的衝動が強まったときに対

抗し、打ち勝つことが出来るのである。

ii　人間愛 Menschenliebe

次に同情の第二段階である人間愛について考察していきたい。この徳は先にも述べたとおり、積極的な性格を持つものである。第一段階においては自分自身の抑制であったが、第二段階である人間愛においては、他者の苦悩を阻むだけではなく、相手を助けるように自分を動かすのである。この純粋な道徳的衝動によって私は、自分自身の精神的な諸犠牲を他者のためだけに捧げてしまうことさえあるのである。このような点から人間愛には次のような格率が生じる。

できる限り万人を助けよ！(9)

人間愛の考察の中でショーペンハウアーは「幸福な者 der Glückliche」を例に挙げて考察している。私たちはエゴイズムの衝突によってしばしば嫉妬という感情を覚える。それは「幸福な者」のように、すべてに恵まれ、万事順調であり続けることは困難であるためである。ショーペンハウアーは、他者への直接的関与は他者への苦悩に限定している。なぜならば、人間はしばしば他者の幸福に対して嫉妬 Neid (neiden) するためであり、また満足や享楽や幸福は、苦痛や苦悩の先にあるものであり、実に消極的なものであるためである。つまり私たちにとって、苦痛や苦悩は積極的なもの、直接に感じられるものである。他者の苦悩、苦痛だけが、私たちの関心を呼び起こすものとなるのである。つまり「幸福な者」は他者からの人間愛の表示が受けられないのである。人間愛どころか「幸福な者」は他者にとっては意地悪 schadenfreude の対象であり、「幸福な者」の墜落を待ち構えているのである。ところが、実際に「幸福な者」が没落し一転して不幸を背負うことになると、それまでの他者の心情には大きな変化が見られるようになる。「幸福な者」の不幸を歓喜するかと思うかもしれないがそうではなく、むしろ嫉妬や意地悪は静まり、人間愛という同情が生じるのである。不幸・苦悩こそが他者の関心をよび、人間愛を生むのである。

同情 Mitleid のみが、あらゆる自発的な公正とあらゆる真正な人間愛の基礎である。しかし私たちがこれらを真の道徳的基礎と経験的に決定づけることはできない。なぜなら私たちが見てとれるのは経験の中に現れる行為であり、

行為者の衝動は明るみには出ないためである。だからこそ私たちは他者の行為にエゴイスティックな動機が少しかもしれないが含まれていたかもしれないという疑いを持ち続ける。そのために私たち人間は苦悩し続ける。したがって私たちは結局、「個体化の原理」を看破しなければ正義や愛の起源と本質を得ることはできないのである。同情は確かに真に道徳的価値を持つ行為といえる。しかし、それは結局一時的なものに過ぎない。私たち人間が真に願う安寧は、これから考察を進めていく「意志の否定 die Verneinung des Willen」によってもたらされる「無」の境地に至ることなのである。

第三節　性格の倫理的相違

これまで真に道徳的衝動である同情について考察を進めてきたが、これはすべての人間に等しく備わっているものではない。反道徳的衝動としてエゴイズムと悪意についても述べてきたが、これらと同情は、人間の意識に備わる根本衝動である。人間のすべての行為の動機は、この三つの衝動に還元することが出来るのである。しかし、この根本衝動は一人の人間に対して均等に同量だけ備わっているものではない。つまり、エゴイズムばかり極端に多い人間もいれば同情に富んだ人間もいる。それならば誰もが同情に満ち溢れた人間でいたいと思うのではないだろうか。しかし残念ながらこの根本衝動の偏りは生得的 angeboren であり、私たちがどんなに努力しても変えようのないものなのである。ショーペンハウアーは皮肉を込めてか「神の恩恵によって(10)」という言葉を用いてこれらが生得的であることを説明し、さらに次のように断言している。

倫理学は、無情な人間を同情に富んだ人間に、したがって公正で人間愛に富んだ人間につくりかえることができるであろうか。—絶対にできない(11)。

ショーペンハウアーは、道徳的教化や人間の改善を意図する倫理学に限界を見出していた。なぜなら私たち人間は現象として現れてくる経験的性格 emprischen Charakter の根底に、現象による変化に依存しない叡知的性格 intelligible Charakter を持つためである。

叡知的性格は、頑強で、生得的、不変的である。つまり個体化の原理 princiipium individuationis にとらわれないものである。そして人間はその生得的性格に従い、自らの

もつ動機によってのみ行為するのである。したがって私たち人間という個体が、どんなに多くのものを経験しようとも、根底にある叡知的性格は作り変えることは出来ないのである。どんなに素晴らしい環境に身を置き、素晴らしい教育を受けたとしても、生得的に悪意に満ちている人間は、自分自身の内面から沸いてくる悪意という衝動からしか行為しないのである。つまり、生得的性格に沿わない行為を他者に強制することは困難であり、当然のことながらその「単なるだまし bloß irregeleitet」では、決して彼の持つ生得的性格を改善することはできない。それでは人間は決して触れることのできない叡知的性格という壁の前に、限界を感じることしかできないのであろうか。この壁の前に、ショーペンハウアーの導き出した「救済」の道を考察していきたい。

第三章　意志の否定 die Verneinung des Willen

第一節　意志の鎮静剤 Quietiv

私たち人間は生得的性格を作りかえることが出来ない。そのため、決して自分自身に満足することは無い。つねに何かに不足を感じ、苦悩しているのである。個体化の原理に囚われている限り人間はこのような苦悩に悩まされ続ける。反道徳的衝動から逃れることは出来ないのである。しかし、ひとたび個体化の原理を見破ることが出来たならば、すべての表象の根本である生きんとする意志を認識することができる。私たちは表象における消滅や死、苦悩を平等に感じ、全体の本質を把握することになるのである。つまりそこには自分自身と他者の人格の間には何の区別もなくなる。そして万物の中に自分を見出し、万物の抱える苦悩を自分の苦悩とみなすような境地に至るのである。個体化の原理を見破っている以上、個々の事物に対する意欲の動因 motiv はもはやない。意志は生の否定をはじめるのである。これまで考察してきた同情は、すべて意志の否定への準備段階なのである。

この生の否定の認識をショーペンハウアーは意欲の鎮静剤 Quietiv とよぶ。これは自分自身の意欲を鎮め、禁欲と諦念へと私たちを導くものである。この意志の鎮静剤が働くとき、私たちは万物と一体であり、意志は何ものにもとらわれずに自分自身を止揚してしまうのである。私たちは、性格を作り変えようと努力をするのではなく、その性格そのものを止揚することこそが重要なのである。

ショーペンハウアーのこの意志の否定の段階ではインド哲学、仏教からの影響が大きい。諦念 Resignation や解脱 Erlösung という語句を借りて自らの思想を確立させようとしたのである。諦念とは、意志の否定によって生を「断念する」という意味のものではない。「一切の苦悩への道を閉ざし、自分自身を浄化し、聖化したいと念ずること[12]」という意味を持つものである。したがって意志の否定を成し遂げた後に現れる境地を意味するものなのである。このようにショーペンハウアーはこの意志の否定という観念的なものを説明するとき、宗教的な思想と倫理的思想を融合したのであり、そうすることでその思想を成り立たせたのである。

第二節　認識の転換

意志の鎮静剤は、物自体である生きんとする意志に本来の自由をあたえるものである。しかしこのとき、物自体である生きんとする意志は、表象である身体を通じて認識されてくるというのに、この意志は表象を否定してしまうという矛盾が生じてしまうのである。意志は自らが現れるために必要不可欠な表象の世界を否定してしまうのである。ショーペンハウアーはこの矛盾を、現実的な矛盾としている。この矛盾は意志の二つの段階においても同様である。まず一つ目は意志の否定の前段階の人間が持つ性格を基準とした動機である意志であり、二つ目は意志の否定後にみられる個体化の原理にとらわれず、且つ動機すら持たないような意志である。一人の個体として考えたとき、意志は本来の性質とは異なるような二通りの働きをし、明らかな矛盾が生じている。ショーペンハウアーはこの矛盾を説く鍵は認識の転換だとしている。

これまでも述べてきたとおり、私たちはたいてい個体化の原理にとらわれている状態にある。この状態である以上、目の前にある動機、つまり表象というごまかしを見破ることは困難である。これは先に挙げた一つ目の意志の段階であり、生きんとする意志は認識されていない状態である。しかし苦悩の先に個体化の原理を見出し、意志の鎮静剤が生じることで、私たちを惑わしていた動機は、もはや何の効果も持たないようになる。これらは矛盾というよりは寧ろ、変化、転換である。これは根本衝動の偏りによる人間の性格においても認識の変化をうかがうことが出来る。すなわち、性格を持つという時点で人間は個体化の原理にとらわれているということを意味する。それを止揚す

ることによって人間は、万物が生きんとする意志を忠実に受け入れるための共通性を持つ行為をとるようになるのである。

第三節　無・彼岸

意志の否定は死への恐れの消滅でもある。そして意志の鏡である世界にとってもまた、世界の廃棄、消滅を意味する。そして個体化の原理である時間、空間、因果律も消滅し、私という主観も他者という客観も、すべて消滅するのである。残されるものは何もない「無 Nichits」である。

この「無」という概念は欠如的無 nihil privativum である。これは無の相対的特性である。これに対して否定的無 nihil negativum もあげることは出来るが、この否定的無は完全なる無、考えることすらも出来ない無である。したがってどのような「無」という概念も相対的に、他のものとの関係においてのみ考えられる欠如的無であるといえるのである。それでは意志の否定後の欠如的無とはいかなるものか。相対的に見て、欠如的無とは個体化の原理にとらわれない世界であり、表象のない世界である。もちろん無であるために世界という概念もなくなってしまうのだが、敢えてたとえるならば、これまで私たちが見てきた表象の世界と逆の世界といってよい。

「無」の境地に至ることが出来るのは、意志を否定できたもののみである。したがって私たちは、「無」に至ったのち、それがどのような状態かを知ることは出来ない。確かに生きんとする意志にとらわれている私たちから見れば「無」はあまりにも空虚で、ただ「無」であることにおびえるだけだろう。しかしながら、苦悩し、意志の否定という順を追って「無」に至った人間からみれば、その「無」こそが安寧、静寂なのかもしれない。そしてこの「無」の境地にいる人間も現実的には私たちのような生きんとする意志に満たされている人間と同じ大地の上で生活している。彼らの目には私たちが映っている。しかし彼らが見ている私たちは身体を伴った個体としての人間ではない。私たちのすべてを見透かすように内奥にある本質をただ静寂の中でみているのだろう。苦悩を超克し、世界を傍観する人間の思考は、もはやはかり知れない。しかしこの「無」こそが私たちにとっての永遠の慰めなのである。

第四章　結　び

私たち人間は出来るだけ苦悩を避けたいと思う。そう思うばかりに曖昧で平らな道ばかりを選んではいまいか。そうして、さほど大きな苦痛に遭うこともなく、表象の世界のささやかな問題に苦悩しながらも、苦悩を突き詰めることなく、有耶無耶にしながら生きているのではなかろうか。ショーペンハウアーの哲学は生きるための哲学である。苦悩を避け、凸凹のない人生を送るのも自由であるが、ショーペンハウアーの倫理学は苦悩と向き合い、生きるための術を説くものである。苦悩に囲まれた私たちの人生は短い。しかし、私たちの人生が終わってもなお残り続ける意志がある。私たちは苦痛を乗り越えた先にある彼岸のために、表象の世界においての大きな苦悩を経験しなくてはならない。おそらく苦痛の少ない道ばかりを選んでいては、彼岸への道は遠のくばかりであろう。

ショーペンハウアーの倫理学はきわめて実践的であり、苦悩を前にしたときですら、現実のありのままを受け止め、それを拒まないのである。現代社会に生きる私たちは他者をどのように認識しているのか。私たちには、苦悩を分かち合うという思想が欠けてはいまいか。現代社会においてショーペンハウアーの倫理学、特に同情の思想は見直されるべきものである。

〔註〕

(1)　Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke,* Band 1 S. 446.

(2)　Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke,* Band 3 S. 742.

(3)　Ibid. S.687.

(4)　Ibid. S.687.

(5)　Ibid. S.729.

(6)　Ibid. S.729.

(7)　Ibid. S.663.

(8)　Ibid. S.746.

(9)　Ibid. S.760.

(10)　Ibid. S.794.

(11)　Ibid. S.786.

(12)　Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke,* Band 1 S. 515.

文献表

・Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke Band I Die Welt als Wille und Vorstellung*, Frankfurt am Mein: Suhrkam, p. 1986.

・Arthur Schopenhauer, *Sämtliche Werke Band II Kleinere Schriften*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp, 1986.

・ショーペンハウアー『ショーペンハウアー 世界の名著45』、西尾幹二訳、中央公論新社、一九八〇年。

・ショーペンハウアー『ショーペンハウアー全集9』、前田敬作、芦津丈夫、今村孝訳、白水社、一九七三年。

・ショーペンハウエル『自殺について』斎藤信治訳、岩波書店、一九五二年。

・ゲオルグ・ジンメル『ショーペンハウアーとニーチェ』、吉村博次訳、白水社、二〇〇一年。